「まちと暮らす」シェアハウス　―みかんハウス―

近年、新しいライフスタイルや多様な住まい方への関心が高まっています。
読者の皆さんは、今どんな住まい方を選んでいますか？
さて、今回記事で採り上げるのは、『自分のペースで多用な人と繋がれる暮らし』をコンセプトに掲げ、今年 10 周年を迎えるシェアハウス「みかんハウス」です。
取材にご協力いただいたのは、オーナーの川西諭さん。温かく和やかな笑顔が印象的な方ですが、なんと上智大学の先生でもあります。
川西さんが想いを込めて建てた「みかんハウス」の暮らしについて伺いました。

―みかんハウスと常盤平という街

馴染みやすい可愛い名前と五角形のロゴが特徴的。正面から見るとコンパクトに感じますが、敷地面積は 272.29 ㎡もあり、最大 9 世帯暮らせるほど広い建物です。また、柱や床は木造建築となっており、温かみのある内装と外見からは想像できない広々とした空間が魅力です。

自室の他には、シェアハウスでは定番の共同スペースがあります。
広々とした共用リビングでは、日光が差し込む窓辺と自由に使用できるワークスペースがあり、部屋の端には暖炉が設置されています。コロナ禍までは、外部のお客様への貸し出しスペースとしても利用されていたそうです。

共用リビング

2 階共用廊下

みかんハウスという名前には意味があります。
建物がある「常盤平」の「常盤」とは、常緑樹のことであり、それにちなんだ名前にしようと考えたところ、果物の「みかん」が候補に挙がったとのことです。
また、「みかん」は「未完」、つまり「未完成」という意味でもあります。シェアハウスで生活するということが、まだまだ社会において一般化されていない中で、他人と共同して生きるということを学び、成長できる場所にしたいという想いが、この言葉には込められています。

建物の形でもあり、ミカンでもあり、12 面体の一つの面でもある？おじぎしている人のようにも？
色々な見方をすることができます。

また、みかんハウスがある常盤平には、ＮＰＯ法人やボランティア団体が多く、子ども食堂や高齢者サポート、外国人サポートが充実しています。地域全体が助け合いの精神を持っていて、街として愛着を持っている人が多いと教えていただきました。

―みかんハウスの始まり

川西さんがシェアハウスに興味を持ったきっかけは、研究でロンドンに住んでいた頃の経験でした。当時ロンドンでは、「フラットシェア」と呼ばれる住まい方が一般的だったそうです。フラットシェアという言葉を初めて聞く人も多いのではないでしょうか。フラットシェアとは、ロンドンの特長的な長屋型を区画ごとに分ける住まい方です。日本のシェアハウスとは少し違い、アパートのような形式になっています。ただ、キッチンやお風呂を共有するという点ではシェアハウスと共通している部分も多くあります。

上京後、長い間一人暮らしをする中で、川西さんは一人暮らしならではの気軽さを感じると同時に寂しさを感じたと言います。その後イギリスでフラットシェアを経験し、「人と緩やかに繋がりながら暮らすのも悪くないんじゃないかな」と考えたことから、現在のみかんハウスが生まれたそうです。

―みかんハウスのこれから

みかんハウスでも哲学カフェや料理教室など、入居者だけでなく地域住民のコミュニティとなる場は設けられていましたが、コロナ禍でそれらは一旦ストップしてしまったそうです。そのコミュニティスペースは建築素材や構造に川西さんのこだわりが詰まっており、みかんハウスに住んでいる人への配慮も残しつつ、地域住民との繋がりを楽しむことが出来る空間だったことがとても印象的でした。コロナ禍によってみかんハウスを取り巻く環境に変わった点は多数あり、以前と全く同じ形で実施するのは難しい状態とのことです。しかし、思いの詰まっている空間だからこそ、現状を踏まえたうえで「今後再開したい」と語ってくれました。

―編集後記

柚木

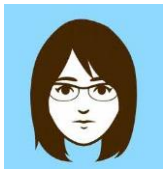
シェアハウスの多くの魅力の裏に、連鎖する課題や継続の難しさがあることを痛感しました。入居審査、共有スペースの管理、コミュニティイベントの運営など、どれもがそのシェアハウスに最適な形で行われなければ、即座に問題が発生します。その問題を一つでも未然に減らしていくことが運営側にできることだと思いました
実際に見学した際、環境に配慮した建築素材が使われていることや、日当たりや生活動線を意識した部屋のレイアウトなど、細部まで工夫が施されていることが印象的でした。これらは、川西さんが思い描いた理想のシェアハウスを形にした結果であり、その理念に共感した居住者が集まっていることで、このような心地良い空間が実現しているのではないかと感じました。

鶴田

取材を通して、多世代型居住の理想と現実のギャップ、そして時代や社会状況に応じて柔軟に変化していく必要性を改めて感じました。地域に根差し、住民同士が支えあい、共に暮らすというシェアハウスの理念は特に魅力的で、都市部において孤立感を感じる人にとって、こうした場所は安心感を提供し、新しいコミュニティを築く可能性を秘めていると感じました。

大熊

取材を通して、入居者によって大きく表情を変えるのがみかんハウスの特徴だと感じました。川西さんは常に「入居者にとって住みやすい環境になるように」ということを考えられていました。川西さんがとても身近な存在であることが、みかんハウスの大きな長所であり、川西さんの存在が、入居者にとって安心感を与え、コミュニティの一体感を高めているのだと感じました。



山田

取材を通して、住まい方の自由度を感じました。
引越しすらしたことがない私としては「シェアハウスという誰かと共存する空間は、ルールが多く大変な空間だ」という偏見がありました。しかし実際に取材に行くとそんなことはなく、とても暖かく、自身の空間を保持できる温かい空間なのだと感じました。特に、みかんハウスは川西さんの思いと優しさが家の構造から詰まっており、思わず住んでみたいと思ってしまったほどです。